佐」、砲兵二個中隊「吉田中佐」、工兵一個中隊「福井大尉」の計二千人弱で守備、「侵さず、侵されず」の態勢にあった。近くには関東軍とは表裏一体の青年義勇隊があり、軍事教練をはじめ指導と面倒を見ていた。なお、満州の国境全線には一七国境守備隊が配備されていた。

やがて千葉陸軍野戦砲兵学校幹部候補生隊をはじめ、移動を重ねて北朝鮮平壌独立野砲一〇連隊へ編入。二十年九月二日、三合里廠舎へ集結を命ぜられ、四個中隊で一個大隊千人の大隊を編成し、平壌付近の作業に出役。三月末に至り、日本海側の興南へ移動、少年院へ収容され、同港よりポセット港へ上陸。シベリア大陸を西進、アルマアタに下車。建設関係をはじめ、煉瓦工場等に就労。続いて、ソ連の犯罪者さえ恐れたカラカンダへ移動した。ソ連では第三位の炭坑であり、日本の国内全出炭量より多いと言われていた。ドイツをはじめ、各国の抑留者が働いていたが、さすがにドイツ人は優秀であると感ずることがあった。当時、ソ連の警備兵に悪質者がおり、ちょっとしたトラブルから射殺される直前に、部下の兵長と私の信用していたバリースという監督に助命されたこともあった。

やがて待ち続けた帰国の時期が訪れ、昭和二十三年九月二十六日、遠州丸で東舞鶴の土を踏むことができた。当時の極限生活は五十数年過ぎた現在でも夢を見て目を覚まし、一生忘れることができない。

酷寒と飢えと重労働に耐え切れず、異国に散った戦友に深い祈りを捧げて哀悼の意を表します。

抑留記

静岡県　安江　進

私は、昭和十六年四月富士宮市富丘国民学校高等科を卒業。同年四月一日満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所、三ヵ月の基礎訓練を受け、温かい母の心に背いてまでも大きな希望に燃え勇躍渡満し、旧満州浜江省一面坡大訓練所に入所した。そしてまもなく同年

七月に関東軍特別大演習いわゆる関特演に参加。関東軍の後方支援のため、旧朝満国境近くの町、朝陽川の物資集積所の警備に当たり、大演習終了後は黒河省黒河市の黒河義勇隊大額訓練所に移行、ソ満国境、北満の警備に当たった。

そして、昭和十七年四月に当時の南満州鉄道株式会社（満鉄）に入社。昭和十九年十二月、戦局日本に不利なる時、徴兵検査一年繰り上げのため十九歳で検査を受け、第一乙種になり、翌年二月に見送る人もいない真夜中、哈爾浜駅から東満の東安の関東軍第八二一部隊に入隊。同年八月六日一期の検閲を受け、星が二つになったとたん、八月九日、突如としてソ連軍がソ満国境の黒龍江を越え不法にも旧満州に侵入した。

そして開戦となり、私達の部隊は軍用トラック五十両ぐらいに弾薬、食糧等々を積み込み、部隊を捨て勃利方面に後退し、東安の駅の裏山に差しかかった時、突如、後方に大きな爆発音が聞こえた。東安駅と列車が空に舞い上がるのが見えた。後で知ったことだが、友軍の工兵隊の手で開拓団の家族及び一般邦人約一千人が亡くなった忌まわしい出来事だった。

私の部隊はどうすることもできず、そのまま勃利方面に向かった。そして、八月九日は勃利の義勇隊訓練所に一泊し、翌日十日に勃利で食糧、燃料を補給、一泊し、部隊の集結を待って、林口、牡丹江方面に向かった。途中道端で手を振って助けを求める開拓団の家族をトラックに乗せ、勃利南西五キロ地点に差しかかった時、北方上空より突然星のマークをつけたソ連機二機から自動車めがけて銃撃された。昼頃から夕方まで何度も何度も繰り返し銃撃、爆弾投下。ここで開拓団の人達も数人は亡くなられたようだった。そして、夜を待ってまた林口方面に向かった。

林口の手前の古城鎮の満人部落付近に差しかかったが、前方にソ連軍の戦車隊がおり、ソ連戦車に向かって肉迫攻撃をすれど、小山のような戦車はビクともしなかった。数人の戦死者を出し、夕暮れとなり、部隊の本部はこの混雑に紛れどこかに逃げてしまった。後は見習士官の阿部曹長が指揮を執り、部隊を集め山中に逃れ、徒歩で牡丹江方面に向かった。これからが苦

難の道だった。

八月の中ごろの中国の山中はもう秋。途中野宿を重ね、蛟河の町の手前十キロメートルぐらいの満人部落で野営中ソ連軍の襲撃を受け、散り散りばらばらになり、私は数人の戦友とともに降伏した。その時ソ連軍と一緒に来た日本の地方人に、戦争は終結、日本は無条件降伏をしたが、無駄な死をしないよう説得され、武器を捨てた。

そして、ソ連の軍用トラックに乗せられ蛟河の町へ。何日かの取り調べを受け、石炭を積む無蓋車に乗せられて何処ともなく真夜中を走り続け、降ろされた所が敦化であった。そして敦化の旧日本陸軍病院に収容され、ここで昭和二十年の一冬を暮らした。その間、シラミによる発疹チフスと栄養失調で多くの戦友が亡くなっていった。特に召集兵で体力のない兵隊が多いようだった。

翌年昭和二十一年の雪解けを待って、「ダモイダモイ」と言われまた貨車に乗せられ、ソ満国境の軍の町、綏芬河で降ろされて、徒歩でソ満国境を越えソ連領に入った。これからが抑留生活の第一歩、ウラジオストクの第十収容所で、昭和二十三年夏まで港の荷役、建築作業等々に駆り出された。

昭和二十三年の夏、移動でセミョノフカの奥のワルフォロメイエフカに移り、駅の近くの収容所に入る。夏は道路作業、冬は山の飯場で伐採、積み込み。山の下の収容所では貨車への積み込み作業等に従事し、昭和二十四年頃から給与も良くなり、私達の収容所生活も少しは良くなった。

二十四年の夏の暑い暑い頃だと思うが、私達が休日の日に川で水泳などしていた時、急に全員集合が告げられ、収容所の所長が、「全員ダモイだ、明日から作業中止、休養しろ」とのこと。後は終わりの日を待つばかりであった。八月の幾日か日は忘れたが、ダモイ列車で住みなれた収容所を後に、一緒に作業をしたロシア人に見送られ、今度は貨車でなく客車であった。そしてウオロシロフの収容所で一カ月ぐらい待たされ、同年十月ナホトカに集結、二千人編成で帰還船の来るのを待ち、同年十月二十日、待ちに待った帰還船

遠州丸に乗船し、苦難のソ連を後にした。

十月二十二日、懐かしの祖国舞鶴港の旧日本海兵団の跡地で大勢の出迎えの方々に迎えられた。これでやっと日本に着いたと思うと急に体の力が抜けてしまった。思えば長い長い苦難の道であった。

図らずもこの手記を書いている日は、今を去る五十三年前の終戦の日と同じ八月十五日である。今日も朝から太陽が照りつけ暑い暑い一日になりそうだ。妻が私のそばで夏の甲子園の高校野球を見ている。

平成十年八月十五日、平和な日本である。今はシベリアの大地に眠る幾多同胞の心安らかにあれと祈る。

平成十年八月十五日

タイシェット抑留の記

静岡県　小山昕爾

昭和二十年七月七日、斉々哈爾の砲兵隊に現役入隊しました。義勇軍の当時の頃よりたびたび所外訓練で軍隊に勤労奉仕し内務班の生活をしたことのある私は、さして緊張もせず、一カ月の初年兵生活を過ごしました。ちょうどその日、私は不寝番の三番立に立つことになりました。八月八日早朝、週番士官の「非常呼集、不寝番はおらんか」の大声に私はびっくり仰天して眠りから覚めました。二番立の戦友が私を起こした記憶が頭をかすめたからです。義勇軍の当時は不寝番の際、時々あったことで、その癖が残っていて眠ってしまい、不寝番不在で非常呼集のラッパを聞き逃したと責任を直感しました。この非常呼集、ソ連軍が満州に侵入した戦争を知らせる緊急なもので、ほかの班の者は完全軍装でハイラル方面へ行動を起こしたと週番士官の小山田少尉が班長に話したのを聞きました。本来なら重営倉に入れられるべきところ、運が良いと言えるのか、なぜか班長は私をあまり怒らず、「お前のお蔭で残留の部隊と行動を共にすることとなった」と言い、班長は私に懲罰として軽機の弾薬六百発の運搬役を命じました。直ちに駅に行き、無蓋車に乗せられました。